

『金剛般若経』から社会的実践へ (予定レジュメ)

谷口富士夫

本発表は、現代日本に生きる我々が市民運動などの社会的実践の根拠を仏教に置こうとする場合、仏教教義のどこに重点を置くべきかについて考察することを目的とする。具体的には、ティク・ナット・ハンが唱導する Engaged Buddhism との関係を考えて上で『金剛般若経』に基づいて社会運動を行うことの有効性、限界などについて検証する。

さて、個人の解脱をそもそもの出発点としている仏教にとって、社会との関わり、とりわけ社会運動に関する側面はあまり強いものではない。しかしながら日本に限定してみても、古くは律令国家の禁を犯して慈善活動に邁進した行基 (668-749) を、日本における仏教の社会的実践の例として即座に思い浮かべることができるし、昭和以降に目を移すと、妹尾義郎 (1889-1961) が指導し、治安維持法によって事実上解散せざるを得なくなった新興仏教青年同盟の活動が知られる。また国外に目を向けると、インド初代法務大臣アンベードカル (1891-1956) が始めて佐々木秀嶺師 (1935-) が引き継いだインド社会における新仏教運動があり、ティク・ナット・ハン (1926-) が唱導する Engaged Buddhism は世界的に広がりを見せて、日本でも彼の訳本が数多く出版されている。

元来がヴェトナム出身の禅僧であったティク・ナット・ハンには仏教經典に解説をほどこした複数の著作があり、*"The Diamond that cuts through Illusion"* も『金剛般若経』の英訳とその語義釈を述べた書である。その基調は、いわゆる「即非の論理」によって二元論的見方を破摧するというものである。

しかし『金剛般若経』には、いわゆる「即非の論理」レトリックを通常の語法に翻訳したならば、社会運動を進めていくに当たって様々なヒントとなる概念が盛られている。たとえば「応無所住行於布施」(4)、「莊嚴仏土」(10、17)、「忍辱波羅蜜」(14)、「則為如来以仏智慧、悉知是人、悉見是人」(14)、「先世罪業応墮惡道、以今世人輕賤故、先世罪業則為消滅」(16)などは、多くの人々を巻き込まなければ成り立たない「運動」において、決して途中で絶望せずに活動を持続するために有効な概念・考え方であると思われる (引用は鳩摩羅什訳を用い、数字は昭明太子の分節による。なお当日の発表では羅什訳を中心に、サンスクリット本を参照する予定である)。

(キーワード) 『金剛般若経』、Engaged Buddhism、社会運動